

である。

尚, 男化胚細胞腫, 門細胞腫等の男化徴候の基因は, 両腫瘍に存在する門細胞にあると考えられる。

105. 卵管の病態生理

(福島医大) 貴家寛而, 遠藤二郎

三谷景一, 嶋根正美

卵の捕捉及び卵及び受精卵の輸送と云う点での卵管の生理的な機能は可成り明らかにされたとは云え現在尚未解決の問題も少なくない。

卵巣の筋収縮運動の交配後の変化を知る目的で, 家兎の別出卵管を綫部, 膨大部, 峽部に分かち, それらの自然収縮状態を桿杆を用い描記した。各部分の自然収縮は夫々特有であり, いずれも交配後変化する。即ち綫部は交配前には毎分3~4回の緩徐な収縮であるが12時間後になると毎分6~8回の比較的規則的な大きな収縮を示し, 24時間では更に頻回で規則的な収縮を示し, 48時間後には交配前の状態に復する。膨大部は交配前には毎分2~4回の緩かな又大波と小波とが複合した様な収縮が見られ, 6時間後には稍く規則的となり, 12時間後には増強し, 24時間後には頻回となり, 36時間後には毎分3~5回の最強の収縮が認められた。48時間後には収縮波は不規則となり, 60時間後には再び不規則な収縮に変化した。峽部は交配前には膨大部と同じく大波の上に小波が重複した様な複雑な不規則な収縮を示し, この状態は交配6時間後にも続き, 12時間後に漸く稍く規則的となり, 24時間後には毎分3~4回の緩徐な収縮と変り, 48時間後には収縮は増強し以後緊張の強い30秒から5分位にわたる大波の他に小波が頻回現われ, 72時間には毎分3~4回の規律的な最大の収縮が得られた。以後収縮は不規則となり振巾も漸次減少する。次にこれらの卵管各部に同じ間隔を以て徐々に電圧を高めながら電気刺激を加えて行くと綫部, 膨大部, 峽部はいずれも段階現象を起して収縮の増大を示すが, 交配後の各部は交配前のそれに比して刺激閾値は低下する。

更に Adrenalin, Cholin chloride, Pilocarpine, Atropin, Cocain, Strychnin 等の薬剤を漸次高濃度にして添加して卵管の収縮運動に対する影響を観察すると, Adrenalin では卵管各部の収縮は増強されるが, 特に膨大部では強く, Cholin chloride でも同様の傾向を示す。Pilocarpin では顕著な作用はなく, 又 Regitin の如き抗 Adrenalin 剤では見るべき作用はない。

次に卵管内腔液の分泌の状態を知る目的で峽部と綫部

を結紮しその内容をカテーテルにて誘導しその量的変化を調べた。卵管内腔液の分泌は発情時強く, 去勢時には著しく減少し, estrogen 投与によつて増加する。又この分泌は Pilocarpin によつて促進される。

更に綫部の卵捕捉機能と, その障害を知る目的で両側の峽部を結紮し実験的に一侧の綫部を焼灼した後10日後に交配させ, 左右の卵管内容を採取し hyaluronidase を添加し, 夫々の側の卵子数と卵巣の出血点とを対比したが, 焼灼側の卵管は開口している限り数は少ないが卵子は捕捉される。

106. 卵管結核の進展と治療過程, 特に時期的に見た病変の差異について

(福島医大) 貴家寛而, 深田三夫, 鎌田昭雄

卵管結核の組織像については従来種々の分類が行なわれ, 個々の特徴的な組織像に対しても多くの名称が与えられているが, 實際上性器結核症として問題になる活動性病変としての結核性肉芽の新旧の差異及び乾酪巣の種々相に就いての検討は従来殆んど試みられていない。著者等は先に報告した子宮内膜結核の治療過程の病理組織学的研究に關聯して, 卵管においても Pap 氏鍍銀染色を利用して上記の点に關して詳細に分析検討したので報告したい。卵管結核の基本的変化は他の臓器結核の小さいと同様に増殖性病変としての類上皮細胞性結核結節の形成と, 滲出性病変の大単核性細胞浸潤であるが, 殊に前者については次の様な時期的に異なる類上皮細胞性結節が区別される。即ち極く初期(約3週間以内)の結節と思われる類上皮細胞性結節に全く好銀線維が見られないもの, 結節の周囲から類上皮細胞間に好銀線維が侵入増生しつつあるもの, 更に結節全体に好銀線維の密網が形成されたもの及び更に古いと思われる好銀線維の太いものから膠元化がはじまりつつある結核結節(約1カ月前後を経過した病巣)が区別される。類上皮細胞性結核結節が治療する場合には先に述べた好銀線維に膠元化がはじまる頃, 即ち形成の1カ月前後から類上皮細胞自身が萎縮性となり, その間にリンパ球様細胞が浸潤し, ついには瘢痕性に結合織の増加した状態で治療する。しかし乍ら他の臓器の結核症と同様に卵管に於いても病変は屢々更に進展し, 一旦好銀線維網が形成された個々の結節がそのまゝ融合乾酪化す事が多い。次に乾酪巣について見ると, H・E染色では一見同様な乾酪巣内にも, 鍍銀染色により, 新旧種々の時期の類上皮細胞性結節が融合乾酪化した所見が認められるものと, 滲出性の単核性細